KAAT
KANAGAWA ARTS THEATRE

レポート 連続講座『ふたつの隅田川』

【第２回】指揮者によるオペラ「カーリュー・リヴァー」曲目解説！！

関連講座「ふたつの隅田川」の第２回（２月８日）は、本公演の指揮者・角田鋼亮氏と、主役の狂女役を歌う歌手の鈴木准氏によって、オペラ「カーリュー・リヴァー」の音楽的特徴が語られました。
鈴木氏の歌、角田氏のピアノによる実演をまじえた、贅沢な作品分析レクチャーから、「注目ポイント」をご紹介します。

【注目ポイント！】

① 男声のみのオペラ、楽器の音色で描き分けられたキャラクター

オペラ「カーリュー・リヴァー」に出演するのは男声歌手ばかり。主役の狂女もテノール歌手によって歌われます。これは狂女役が、作曲者ベンジャミン・ブリテンの公私にわたるパートナーであったテノール歌手ピーター・ピアーズを想定して書かれたためです。

アンサンブルを形成する楽器には、ブリテンが日本で出会った邦楽器の響きが投影されています――フルート（ピッコロ）＝龍笛、ホルン：ほら貝、ハープ＝琴・琵琶、スモールドラム、スモールベル、ビックベル＝太鼓・鐘・鉦、室内オルガン＝笙。さらに「狂女」にはフルート、「渡し守」にはホルン、「旅人」にはコントラバスとハープというように、各キャラクターに異なる音色の楽器を組み合わせ、響きによってキャラクターを描き分けているのも、このオペラの特徴です。またヴィオラは「感情」、コントラバスは「足取り」を表現する役割を担っていると考えられます。

【登場人物】

狂女（テノール）／渡し守（バリトン）／旅人（バリトン）／修道院長（バス）／精霊の声（ボーイソプラノ）
合唱：テノール３人、バリトン３人、バス２人

② ピーター・ピアーズの特徴・個性を想定した「狂女」役

ピアーズはもともとバリトン歌手で後にテノールに転向したこともあり、高い音域ばかりでなく、豊かな低音を響かせることができる歌手でした。それゆえ「狂女」役には、通常のテノール・パートより低めの音域における声楽技法にも豊かな表現力が求められます。またピアーズが得意としたポルタメント（2 つの音の間をスライドさせるように滑らかに素早くつなぐ奏法・唱法）が、登場シーンをはじめ、狂女のパートの随所に現れます。この「狂女の嘆きのポルタメント」は、イタリア・オペラの決めどころに現れる優雅なポルタメントと異なり、奇妙な雰囲気を醸し出すよう、人工的に歌われるのが特徴です。

③ シンメトリーの構成

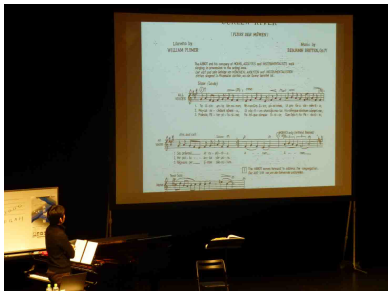
このオペラは、「川辺の教会で中世の修道士たちが演じる奇跡劇」という設定で、入場と退場に単旋律聖歌「この日も終わりぬ」が歌われます。全体が「入場」―「本編」―「退場」というシンメトリー構造になっているだけでなく、本編自体も「隅田川を渡るシーン」を中央に配し、「渡る前」と「渡った後」を前後に置くシンメトリー構造をとります。

修道士たちの入場（イントロダクション）
隅田川を渡る前
本編 --- 隅田川を渡る
隅田川を渡った後
修道士たちの退場（エピローグ）

④ 狂女の苦しみ、痛みを表現する「増４度」音程

「狂女」のパートに特徴的なのが「増４度」音程です。不気味な雰囲気を醸し出すこの音程は、「トリトヌス（三全音）」といって、教会で使うことを禁じられていました。狂女登場のシーンでは、増４度「ラ～レ♯」に完全4度「レ♯～ソ♯」を組み合わせた旋律が、狂女の苦しみ、痛みを表現するかのようにポルタメントで歌われます。

⑤ キーナンバーは「７」と「５」



狂女が身の上を語るシーンでは、「７つの音」からなるフレーズが中心となり、その前のシーンには「５つの音」のフレーズが頻出します。ブリテンは「５・７・５～」の和歌のリズムからアイデアを得たのかもしれません。また、機能和声の脈略とは関係なく点描的に音が配置されているので、歌手は音程をとるのに苦労するとのこと。「５」「７」という割り切れない数字のフレーズ、そして音を探りながら一歩ずつ進む姿には、我が子を探してさまよう狂女の心中が投影されているかのようです。

⑥ドラマのクライマックスは、狂女とフルートのみのシンプルな世界

すべてを知った狂女が「この世でわが子にめぐり逢うことはない」と嘆き悲しむシーンは、きわめてシンプルに狂女とフルートだけで演奏されます。狂女は半音を行ったり来たりする音の反復を歌い、フルートは狂女から発せられる息のなかに入りこんでいくかのように歌を追います。声と楽器が一体となり、無駄をそぎ落とした音の動きで、狂女の悲しみを深く表現した“静寂のクライマックス”は、ブリテン音楽の真骨頂です。

⑦ そして奇跡が……

狂女の嘆きに心を動かされた人々にうながされて祈る狂女。するとどこからともなく子どもの声が聞こえます。「母よ、主の復活の日にまた会いましょう」――この世のものとは思われない、しかしまぎれもないわが子の声に、狂女は救いを見出すのでした。今回の公演では、ブリテンの指定どおり、女声歌手ではなく、ボーイソプラノによって歌われます。繊細さと強さを併せ持つボーイソプラノの声を、ブリテンはこよなく愛していました。

⑧ 日本語で味わう「カーリュー・リヴァー」

今回の公演のもう一つの特徴は、日本語（若杉弘訳）で歌われることです。昨年、イギリスと日本で行われた公演では英語で狂女役を歌った鈴木准さんは、「日本語の美しさを観客に伝えるのも声楽家の使命」と、日本語上演に向けて意欲を燃やしています。

能「隅田川」から、どのような芸能が派生していったか、そしてブリテンと清元を組み合わせた今回の公演「隅田川二題」の見どころ・聴きどころは？――今後の連続講座にご期待ください！

第３回：川と芸能 ～“隅田川もの”の系譜と清元「隅田川」～ ２月 24 日（日）14:00 中スタジオ

第４回：花柳壽輔 × 宮本亜門　トークセッション ３月２日（土）11:00 中スタジオ

チケットかながわほかで好評発売中!!

隅田川二題 ～<オペラ>カーリュー・リヴァー／<日本舞踊>清元 隅田川～

2013年 3月22日（金）19:00・23日（土）　KAAT 神奈川芸術劇場〈ホール〉

【チケットかながわ】045-662-8866(10:00~18:00)